SHOW-HEYシネマルーム

★★★

コンパートメントNo. 6

2021年／フィンランド・ロシア・エストニア・ドイツ映画
配給：アットエンタテインメント／107分

2023（令和5）年2月18日鑑賞	シネ・リーブル梅田

Data　２０２３－２５

監督・脚本：ユホ・クオスマネン
原作：ロサ・リクソム『コンパートメントNo. ６』
出演：セイディ・ハーラ／ユーリー・ボリソフ／ディナーラ・ドルカーロワ／ユリア・アウグ

みどころ

本作の邦題は寝台列車のことだが、ヒロインがモスクワから世界最北端の駅を目指すのは、ペトログリフ（岩面彫刻）を見学するため。まずは、石川さゆりの名曲『津軽海峡・冬景色』の世界との“異同”をしっかりと！

二昼夜もかけた寝台列車の旅では相棒が大問題。それが“最悪の男”だったら・・・？本作前半は途中下車まで決意した最悪の相棒との会話を味わいたい（？）が、次第にそれが変化！そして、アレレ、ある時、２人はキスを交わすまでに？それは一体なぜ？

目的地に到着すれば乗客同士はお別れ！それが本来のルールだが、本作ではそこからクライマックスの物語が始まっていく。しかし、この物語はどこかへン！私には違和感がいっぱいだから、カンヌ国際映画祭でのグランプリ受賞に、異議あり！

――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――

■□■第１作もカンヌで受賞！本作もグランプリ！その出来は■□■

本作は、フィンランド人の監督ユホ・クオスマネンによる長編第２作。その第１作は、フィンランド初のボクシング映画にして、第１９回カンヌ国際映画祭でのある視点部門でグランプリを獲得した『オリ・マキの人生で最も幸せな日』（１６年）（『シネマ４６』３０３頁）だ。そんな彼の長編第２作たる本作は、２０２１年のカンヌ国際映画祭のコンペ部門でグランプリを獲得した他、世界中で１７冠を達成！新聞紙評でも絶賛されているから、こりゃ必見！『キネマ旬報』２０２３年２月下旬号の「REVIEW 日本映画&外国映画」でも、２人の評論家が星４つだから、こりゃ必見！

そう思ったが、鑑賞後の私の評価は、はっきり言ってイマイチ。「REVIEW 日本映画&外国映画」で、１人だけ星２つだった評論家と同じく、私の評価は低い。それは一体なぜ？

■□■タイトルの意味は？主人公はなぜこの列車に？■□■

「上野発の夜行列車　おりた時から　青森駅は雪の中　北へ帰る人の群れは　誰も無口で　海鳴りだけをきいている　私もひとり連絡船に乗り　こごえそうな鴎見つめ泣いていました　ああ津軽海峡・冬景色」（作詞：阿久悠）。これは、石川さゆりが歌った名曲『津軽海峡・冬景色』の歌詞。これは、東京の上野駅から本州最北端の青森駅までたどり着き、青函連絡船に乗って津軽海峡を越えて北海道へ渡る人々を描いた名曲中の名曲。そこには、竜飛岬等の地名が散りばめられているが、アイドル歌手だった石川さゆりが、切々と女心を歌う演歌歌手に転換した記念すべき曲だ。それに対して、『コンパートメントNo.６』と題された本作は、モスクワから世界最北端の駅ムルマンスクへ向かう寝台列車の旅がテーマだから、まずは、それらの位置と距離関係をしっかり確認したい。

本作のストーリーは、１９９０年代、モスクワに留学中のフィンランド人の女子学生ラウラ（セイディ・ハーラ）が、恋人関係にある同性の大学教授イリーナ（ディナーラ・ドルカーロワ）にドタキャンされたため、一人でムルマンスクへ古代のペトログリフ（岩面彫刻）を見に行く旅に出るところから始まっていく。ペトログリフに一体どんな価値があるのか、私にはサッパリわからないが、考古学を研究しているラウラにとって、それは非常に重要らしい。本作のタイトルになっている「コンパートメント」とは、ソ連（ロシア）の寝台列車のこと、そして、“No.６”とはその６号室のことだが、日本にある寝台列車とはかなり様相、作りが違っているので、それに注目！２等、３等の区分けがあるのは日本と同じだが、モスクワからムルマンスクまでは、二昼夜もかかるらしいから、女の一人旅だと同行者の相棒が誰になるかが大問題だ。

■□■こりゃ最悪！下車して乗り換えまで決意！ところが！■□■

日本の新幹線は快適だが、それは新幹線を経営しているJR（昔は国鉄）という企業の優良性と共に、それを利用する多くの日本人の国民性にある。つまり、日本人は概ねマナーがいいということだ（もちろん、例外はあるが）。それに比べると、１９９０年代のソ連（ロシア）の長距離寝台列車の利用客のマナーの悪さは、ラウラの同室になった男リョーハ（ユーリー・ボリソフ）の行動を見、ラウラに対する言葉を聞けばよくわかる。

敢えてそれをここでは書かないが、それは今の日本の基準によれば、迷惑行為（セクハラ？）として訴えることができるレベルだから、まずはそれに注目。そのため、ラウラは車掌に座席の変更を申し出たが、それが無理だとわかると、ある駅で列車を降り、大損を承知のうえで、次の列車に乗り換えようとまで・・・。もっとも、そこで恋人のイリーナに電話したところ、やけにつれない対応をされてしまったため、結局、ラウラは・・・？

列車に戻れば、またあの嫌な男が嫌な態度を示してくるが、これからはとにかく我慢、我慢。ラウラは自分にそう言い聞かせたが・・・。

■□■女心の微妙な変化は？その点が絶賛だが、さて？■□■

リョーハの自己紹介（？）によると、彼は炭鉱労働者。つまり、ある現場に向かうため、

この列車に乗っているわけだ。それに対して、ラウラはペトログリフを見学するため（だけ）に、二昼夜もかけて、ムルマンスクに向かっている学者の卵だから、いわゆるインテリ。冒頭に見る、アカデミー関係者のパーティー風景を見ても、ラウラがそんな世界に憧れていることがよくわかる。ただ、恋人との関係が微妙にうまくいっていない点が気がかりだが・・・。

しかして、本作はコンパートメント６号室という寝台列車（＝密室）の中で織りなされる、出発時は相性最悪だった男女の心の変化を描くロードムービーとして絶賛されている。たしかに、映画としては、いろいろなシチュエーションを用意し、その一つひとつの過程の中で微妙に変化していくラウラの女心、リョーハの男心をうまく表現している。しかし、一晩列車が停車する時、リョーハの車にラウラが乗り込む姿を見ると、アレレ。こりゃヤバいのでは？誰でもそう思うはずだ。他方、車掌から質問されている（３等車の？）怪しげな（？）男性客をラウラがコンパートメント６号室に引っ張り込む（？）風景も、第１に乗車システム上の問題として理解できないし、第２にラウラとの雰囲気が良くなっていくこの男の登場で、リョーハが明らかに拗ねていくストーリーが理解できない。

その他、私には本作の肝のストーリーであり、評論家諸氏が絶賛する中盤の展開にあまり納得できない。その不満がピークに達するのは、まさかまさか、２人がコンパートメント６号室内で抱擁しあい、キスを交わすシーンの登場だ。えー、嘘だろう。私はそう思わざるを得なかったが・・・。

■□■２人の縁は到着まで！岩面彫刻見学は一人で！ところが■□■

列車の旅で相席になった者同士が会話を交わし、親しくなるのは、世上よくある風景。二昼夜も要する寝台列車の旅ともなれば、それはなおさらだ。したがって、当初最悪だったラウラとリョーハの２人が、目的地のムルマンスクに到着する頃には打ち解けていても何ら不思議ではないが、キスまで交わす仲になるのは、よほどのことだ。その１つの要因は、ラウラが引っ張り込んだ（？）、一見人の良さそうな青年が、実はとんでもない窃盗犯だったことだが、そのバカバカしい展開（？）はあなた自身の目でしっかりと。

もっとも、いくら親しくなっても、目的地に列車が到着すれば、リョーハは炭鉱の現場に、ラウラはペトログリフの見学に、と分かれていくのは当然。ところが、「雪の厳しい今の季節にペトログリフの見学はできない」と言われたラウラが、何を思ったのか、炭鉱現場にリョーハを訪ねていくところから、本作ラストの物語が始まっていく。思いがけないラウラの訪問にリョーハはビックリだが、そこから車の手配をし、極寒の雪の中をペトログリフに向けて進んでいくリョーハの姿はたくましい。しかし、一介の出稼ぎ炭鉱労働者に過ぎないリョーハが、なぜこんなに金に糸目もつけず、猛吹雪の中を命の危険さえ冒して、ペトログリフ見学のため車を進めていくことができるの？それが私には全く不可解だ。現に２人の会話の中には、「このまま死んでしまうの？」という恐ろしいものさえ登場してくるから、この旅がかなり危険なものであることは明らかだ。

本作は期せずして、２人の評論家が「いい意味で裏切られた」と書いている。しかし、そんなラストに向けての物語を見ていると、私は「悪い意味で裏切られた」と言わざるを得ない。

■□■２つの伏線に注目！それが洒落た結末に？■□■

フィンランド人のラウラとロシア人のリョーハとの間には、元々会話が十分通じないという問題があった。そのため、コンパートメント６号室内では、「フィンランド語で愛しているは何と言うんだ」と絡んでくるリョーハに対して、ラウラは、「ハイスタ・ヴィットウ（Haista vittu)」（ホントは「Fuck you」という意味）と答えて、変な言葉を教えていたが、本作ラストでは、それと同じシーンが２人の間に登場するので、それに注目！また、２人が食堂車で食事をしながら会話をしている時、ラウラが描いたリョーハの似顔絵を見せて、「あなたも私の似顔絵を描いて」とおねだりをするシーンが登場する。その時、結局リョーハは「描けない」と断ったが、この会話はそれまで最悪だった２人の関係を“融和”に向かわせる大きな契機になったのはまちがいない。しかして、本作ラストで、リョーハが描いたラウラの似顔絵をタクシーの運転手がラウラに手渡すので、それにも注目！

本作がカンヌ国際映画祭のグランプリを受賞した理由の１つとして、そんな伏線が最後に洒落た形で結ばれるシーンが挙げられているが、私にはそれも取ってつけたようで、イマイチ。そのため、残念ながら私の本作の評価は星３つ。

２０２３（令和５）年２月２７日記